

[研究ノート]

遠隔地の大学と高等教育機関空白地域による 連携ネットワーク構築とデザインの展開可能性

—静岡県菊川市を事例として—

Possibility of Building a Collaborative Network and Developing Design by Remote Universities and Higher Educational Institutions in Vacant Areas

—A Case Study of Kikugawa City, Shizuoka Prefecture—

堀場絵吏

HORIBA Eri

〈抄 録〉

地域課題の解決の核として大学による社会貢献の役割が重要視されているが、高等教育機関空白地域ではいかにして大学と連携した地域振興を実践していくかが課題となっている。こうした背景の下、静岡県菊川市では市内の中学校や高等学校、隣接地域の高等教育機関との連携による地域振興を推進しており、市内での連携における新規参入も積極的に受け入れる土壌を持つ。本稿では、菊川市で文化芸術事業を企画運営する一般社団法人とともに筆者や有志学生が参画したプロジェクトを事例として、遠隔地の大学と地域における連携ネットワーク構築とデザインの展開可能性について、運営体制や学生の参加動向、地域と学生の受けとめを基に取組みの成果と課題を考察した。

キーワード：地域連携、遠隔連携、コーディネータ、学生活動、市民協働

Abstract

The role of universities in contributing to society as the core of solutions to regional issues has been gaining importance, and the challenge is how to implement regional development in collaboration with universities in areas where there is an absence of higher education institutions. Against this backdrop, Kikugawa City in Shizuoka Prefecture is promoting regional development through cooperation with junior high schools and high schools in the city and with higher education institutions in adjacent areas, and the city is open to newcomers in this area. This paper summarizes the possibility of building a collaborative network and developing design between universities in remote areas and the region, using as a case study a project in which the author and volunteer students participated together with a general incorporated association that plans and manages cultural and artistic projects in Kikugawa City. The paper then analyzes the management system, student engagement, and the perceptions of the local community and students.

Keywords: University and region collaboration, Remote collaboration, Coordinator, Student Activities, Civic Empowerment

1. はじめに

近年、地域課題の解決の核として大学による社会貢献の役割がますます重要視され、デザインをキーワードに掲げたプロジェクトが数多く見られる。これには、地域理解を深める意味で地元大学が地域に貢献する取組みが多いように思われるが、そもそも大学キャンパスを持たない高等教育機関空白地域では、いかにして大学と連携した地域振興を実現できるであろうか。

もとより、高等教育機関空白地域に限定せず、大学が継続的に地域の活性化に取り組む活動には、総務省の域学連携がある。域学連携とは、総務省の定義で、「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」のことである。域学連携の活動の意義と課題について、総務省(2022)は、都会の若者には「地域への理解」を、地域には「気づき」を促し、学生や地域住民の人材育成に資することができるとし、ノウハウの確立、継続的に実施できる仕組みづくりの必要性を示している。

そこで、域学連携に注目して大学の活動の実態を辿ると、萩原、井上(2019)によれば「学生個人やサークル活動をはじめ、参画への任意性が高いものから、正課の必修科目としての活動をはじめ、参画への任意性が低いものまで多様である」とし、複数年にわたり同一地域で活動を継続している必修科目では、一定数の学生の参画が毎年見込め、大学が特定の地域と関わり続けることで双方にノウハウやスキル等を蓄積しやすいことがメリットである一方で、デメリットには、毎年学生が交代することで学生側の専門性が得られないことや、必修科目のため関心はないが参加せざるを得ないと捉える学生が一定数含まれる可能性がある」と指摘する。

このことから、参加の任意性が低いとされる正課外の活動に着眼すると、大学として正課の取組みではないからこそ、関心のある学生が同じ地域に継続して関わりを持つことができれば、学生自らが社会貢献のあり方を主体的に考える学びにつながられるのではないだろうか。

そこで本研究は、一つ目に、遠隔地の大学と高等教育機関空白地域がどのような手法で連携ネットワークを構築できるか、二つ目に、デザインによる地域貢献を目的とした活動でどのような取組みを展開できるか、実践、検証することとした。

2. 方法

2.1. 実践・考察の方法

本研究は、高等教育機関空白地域である静岡県菊川市(以下、菊川市)を対象地とした。筆者は、地域と関わりがある東京圏の一般社団法人や現地NPOの支援を受け、有志学生とともに菊川市で継続的な活動の実践に取り組んでいる。本稿は2021年度の実践結果を示したものであり、遠隔地の大学と地域による連携ネットワーク構築の手法と、正課外の活動における地域デザインの展開について、運営体制や学生の参加動向、地域と学生の受けとめを基に取組みの成果と課題を考察した。

2.2. 対象地の概要

菊川市は、静岡県の西部地域(東遠)に位置し、東京からはJR東海道新幹線を使って掛川駅まで約1時間50分、掛川駅からはJR東海道本線に乗り継いで菊川駅まで約5分で行くことができる。東遠

とは静岡県遠州地方の東部を指す呼称であり、東部には明治初頭の大規模開拓による「日本一の大茶園」牧之原台地が広がる静岡県の茶の一大生産地である。温暖な気候に恵まれた自然豊かな地域で、名産のお茶をはじめとして深蒸し茶の里「お茶のまち菊川」としても知られる。総人口は令和2年の国勢調査では47,789人である。外国人住民の状況を辿ると、2021年6月末における法務省の在留外国人統計によれば、都道府県別在留外国人数は東京都が第1位の541,807人に対し、静岡県は第8位の99,143人である。菊川市における令和3年1月末時点における外国人住民数は3,638人で、総人口に対する比率は7.53%と、静岡県内における市町別在留外国人数の割合で第1位となる。国籍別ではブラジルが最も多く、2,114人と外国人国籍の約60%を占める。これには平成2年の出入国管理及び難民認定法の改正施行以後に増加した背景を持つが、近年はベトナムやインドネシア等のアジア各国から技能実習生としての来日が増加しており、外国人住民の増加と多国籍化は今後も継続することが見込まれている。こうした背景からか、市民からは市外の人を大らかに受け入れてくれる佇まいが感じられる。

また、菊川市では、2005年1月の市制施行から「コミュニティ（地域社会）を核としたまちづくり」が目標に掲げられ、市民との協働が積極的に推進されている。特に、菊川市がNPO法人アートコラールきくがわ（以下、アートコラールきくがわ）¹⁾に運營業務を委託する菊川市市民協働センターは、菊川市における市民協働の拠点といえる施設で、市民による積極的な活用が顕著である。菊川市は教育機関との連携の取組みとして、市内の2つの高等学校とフレンドシップ協定を結んでいる。静岡県立小笠高等学校では「地域の課題を考える教科連携課題研究」を、常葉大学附属菊川高等学校美術・デザイン科では「みらい学講座」においてアートコラールと協働し、アートのチカラで地域を元気にする芸術文化支援事業を推進している。さらに、本研究において重要な高等教育機関との連携という視点では、市外に位置する静岡産業大学と包括連携協定を締結し、知的・人的・物的資源の活用等で連携・協力を図っている。

3. 実践・結果

3.1. 事業概要と運営体制

筆者が菊川市における活動に取り組んでいく端緒として、2021年7月に、地域で文化芸術活動の支援を行う一般社団法人野ノ編集室（以下、野ノ編集室）²⁾代表の工藤大貴氏から、野ノ編集室が令和3年度事業の一つとして主催する「きくがわの詩プロジェクト」への参加提案を受けたことに発する。この取組みは、本事業の約2年前から外国人と日本人のアート企画を考えていた野ノ編集室が、詩を通して菊川市に住む全ての市民が外国人や日本人が国籍の垣根を超え、まちの風通しを良くすることを目指すものである。「詩を集める装置」を市内に設置して、市民から「コロナ禍のひとりの時間」をテーマに詩を募集し、集まった詩は詩集にまとめ、国登録有形文化財である「菊川赤レンガ倉庫」で詩集の販売や詩の展示を催した。

本事業には、アートコラールきくがわが共催事業として菊川市内の団体・事業所等との調整に協力した。運営チームは、主催者である野ノ編集室を中心に、プロジェクトの各取組み内容から専門性を発揮できるメンバーとして、玉川大学有志、デザイナー、詩人、学生サポーターが加わり、それぞれが連携を図った。この過程で構築されたネットワーク関係図を図1に示す。

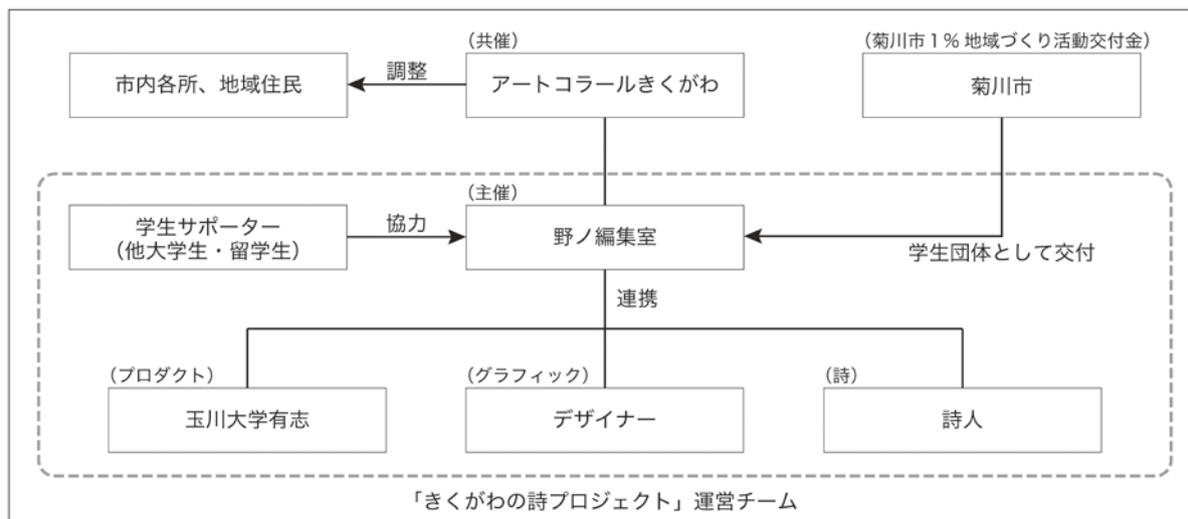


図1 令和3年度事業 ネットワーク関係図

既に野ノ編集室がアートコラールきくがわと共催の関係にあり、そこに玉川大学有志が活動に加わったため、最初に連携の契機を見つけることができれば、遠隔地の大学であっても地域とのネットワーク構築はスムーズにいくものであったといえる。他方、初年度の活動に際して高等教育機関空白地域を条件にして地域へ入ることに特別な制約は見つけられなかったが、本運営体制によって、菊川市と東京圏の大学がつながりを持ち、今後、新たな活動に取組むきっかけを構築できたと考えている。

3.2. プログラム設計と参加学生の動向

大学としては、学生が中核的存在となって話し合いながら、アイデアが深化されることを企図して、対話の促進や活性化を促すことができるワークショップを主とするプログラムを整えた（表1）。

表1 実施日、時間及び内容

回 実施日	時間	内容
第1回 2021/08/08 (土)	13時～16時	ガイダンス／企画ワークショップ ・自己紹介 ・プロジェクトの説明 ・アイスブレイク
第2回 2021/08/21 (土)	11時～14時	企画ワークショップ ・菊川市に関するリサーチ
第3回 2021/09/05 (日)	11時30分～ 14時30分	企画ワークショップ ・ブレインストーミング
第4回 2021/09/19 (土)	10時～16時	企画ワークショップ ・模型による試作1
第5回 2021/10/03 (日)	13時～16時	企画ワークショップ ・模型による試作2 ・図面作成
第6回 2021/10/14, 21, 22, 11/4	2時間程度	制作 ・メーカーズフロアでポストの材料加工、組立て
第7回 2021/11/17	11時～17時	設置 現地に訪問し、市内10ヶ所にポストを設置
第8回 2022/03/25, 26, 27		成果発表 ・詩の展覧会で、ポストに寄せられた詩を展示

平常授業期間外である夏季休暇中に活動を進め、学内施設を使用して制作するフェーズは平常授業期間中に設定したが、次に示す学生の参加状況から読み取れるように、継続して活動に参加する学生には平常授業期間かそうでないかは大きく影響がなかったといえる。

プログラム全体で参加した学生は、10名であった。本活動は、単位化される科目として履修者やゼミナールの学生を抱えているわけではないため、有志の学生で構成される。プログラムと参加学生の動向を探るため、玉川大学芸術学部2年生をA～D、同大学同学部4年生をE、同大学教育学部2年生をF、他大学生をG, H、留学生をI, Jとして、学生の参加状況を表2に示す。

表2 学生の参加状況

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
第1回	対面	対面		対面		Zoom			対面	対面
第2回	Zoom						Zoom	対面	対面	対面
第3回	Zoom	対面	対面		Zoom		Zoom		対面	対面
第4回	Zoom	対面	対面				Zoom			
第5回	対面	対面								
第6回	対面	対面	対面							
第7回	対面	対面								
第8回	対面	対面	対面							

同じ学生が数年にわたり地域とつながることを狙いとして、筆者が直接参加を呼びかけた2年生のA, B, Cの3名には、継続して参加する様子を確認することができた。学生の口コミから参加したD, E, Fは、1回の参加となり、活動に興味を持ち試しに参加してみたいという姿勢は見られたものの、実際に継続していくには熱量が足りなかったものと考えられる。学生サポーターに位置付けられるG, H, I, Jは、第3回まで1回以上の参加が確認できたが、デザインを具体化する第4回から参加者の離脱が見られる結果となった。アイデアが決定したことで自身とプロジェクトの関わりが一区切りし、専門が異なるデザイン分野に抵抗あるいは興味なくなったためと推察される。このことから、正課外の活動では、学生とプロジェクトのマッチングを図ることが重要であったと考えられる。

3.3. 企画ワークショップ、制作及び設置

活動当初、コロナ禍で市外からの受け入れに制限があったため、現地訪問が叶わない時期が続いた。そこで、デスクトップリサーチや工藤氏からの情報を基に、学生が菊川市に対する地域理解を深め、プロダクトの企画・制作に取組みはじめた。市民に詩を投函してもらう方法から約40点のアイデアを検討した結果、多くの市民の声を集めるために「詩のポスト（以下、ポスト）」を制作して、市内各所に複数設置する案に至った。ポストは菊川市の田園風景を想起させる「のれん」をモチーフにデザインされ、木工ボンドで簡単にパーツを組み立てられる構造が特徴である。「のれん」にシルクプリントされた「てんてん詩集」ロゴは、デザイナーによるものである。ポストの材料は、メーカーズフロア³⁾のレーザーカッターで加工した。全てで10個を制作し、5個は学生が組み立て、残りの5個は2021年11月16日に工藤氏とデザイナーがブラジル人学校のシイ・ソヒゾデクリアンサで開催したワークショップで、ブラジルにルーツを持つ中高生12名が組み立てた。ポストの設置先は、アートコラールきくがわが選定した。2022年11月17日に、アートコラールきくがわ理事長の笠原活世氏、工藤氏、デザイナー、筆者、学生2名で市内10ヶ所にポストを設置した（図2）。設置期間は、2021年11月17日～2022年1月25日の約2ヶ月で、90篇の詩が寄せられる結果となった。

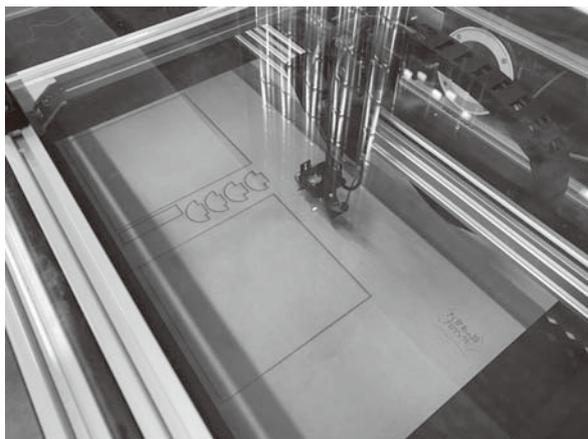
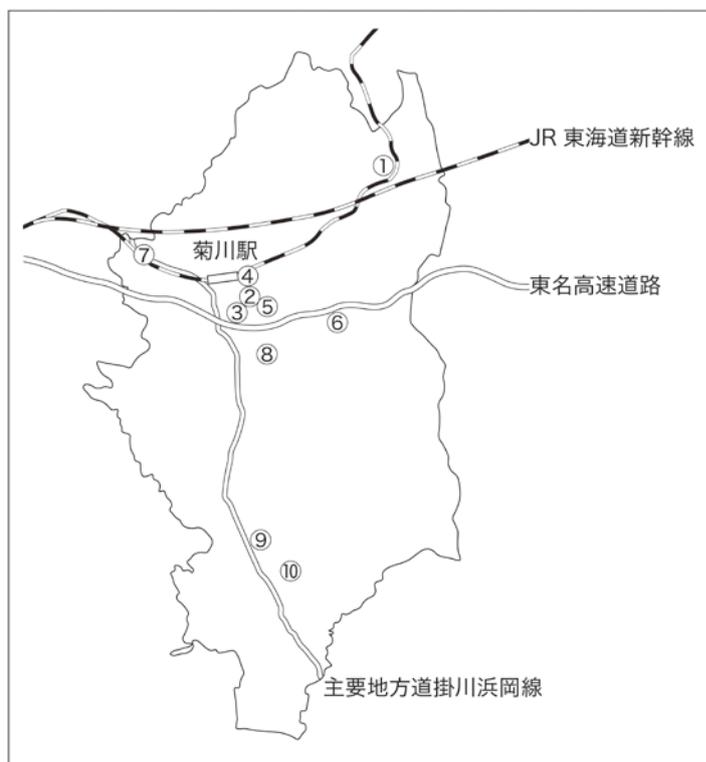


写真1 レーザーカッターによる材料加工



写真2 菊川市市民協働センターのカウンターに設置されたポスト



No.	場所
1	ラブリna牧場 ※NPO法人うまのあと
2	菊川市市民協働センター プラザきくる2階 ※NPO法人アートコラールきくがわ
3	菊川文庫
4	菊川赤レンガ倉庫 ※NPO法人菊川まちいき
5	Nimes (ニーム) ※雑貨屋
6	洋菓子工房グリフォン
7	龍雲寺 ※だれでも食堂
8	菊川文化会館アエル
9	小笠図書館
10	シー・ソヒゾデクリアンサ ※ブラジル人学校

図2 ポストの設置協力先（アートコラールきくがわ提供資料に基づき筆者が作成）

3.4. 展覧会

集まった詩から野ノ編集室が詩集を作成し、2022年3月25日～3月27日に、菊川赤レンガ倉庫を会場とした詩の展覧会「てんてん詩集展」で詩集の販売と展示を実施した。筆者は展覧会の会場構成と設営監督に、学生3名は展覧会の運営業務に携わった。展覧会の3日間の来場者数は474名で、詩集は47冊を売り上げた。詩集の売上は、次年度の活動予算に充填される。来場者数と詩集の売上に着眼すると、来場者の約



写真3 「てんてん詩集展」会場構成

10人に1人が詩集を購入したことになり、同一世帯分を勘察しても地域からの注目度の高さがうかがえる結果となった。

3.5. 地域と学生の受けとめ

展覧会来場者を対象にアンケートを配布し、展覧会について自由に感想を記入してもらった結果（抜粋）は、以下の通りであった。

- ・市内に住んでいますがとても住みやすいところとは理解していても、実際はよく見たことはなく、「詩」と合わさると、その趣きが心に伝わりやすかったです。
- ・自分が書いた作品が、形になってとっても嬉しかったです。雰囲気も素敵でした。ありがとうございました！！
- ・地域の人をまきこんだ素敵な企画だなと思いました。知っている場所の風景が出てくると読みだり見たりしていて嬉しくなります。

また筆者が、2022年3月26日に、菊川赤レンガ倉庫前で笠原氏に「東京圏の大学が菊川市で活動することをどのように感じているか。また今後どのような活動を期待するか。」について聞くと、以下の回答（抜粋）があった。

- ・東京の大学とのつながりができることで、外からの若者視点で菊川市の魅力を取り上げてくれることは、今後のまちの発展に寄与できると感じた。
- ・菊川市をフィールドとして、玉川大学芸術学部の学生たちの個性や専門性を活かした活動を今後も地域に展開して欲しい。

このことから、プロジェクトの取組みそのものや、遠隔地の大学が地域に関わることに對して、地域からは概ね好意的に受けとめられたことが確認できた。他方、学生からの受けとめについては、2022年2月に、継続して活動に参加した学生3名にそれぞれ振り返りを400字～600字程度で記入してもらった。ポストの設置で現地に訪れたことがある学生2名には、「菊川市を訪れてみての感想（地域の雰囲気や人と話した印象）」について聞いた。回答（抜粋）は以下の通りであった。

- 学生A 私が菊川市を訪れて感じたことは、人々がとても優しく、あたたかいということです。詩のポストを各地にお渡しにいった際、市役所の方々やボックスを置かせていただくスポットの方々が私たちが心から受け入れてくれて、プロジェクト自体を非常に喜んでくれました。話していてそれが伝わりましたし、とても嬉しかったです。菊川の人々はとても近い距離で繋がっていて、コミュニケーションをとっているのだと感じました。
- 学生B 2021年11月中旬ごろ、このプロジェクトに携わるにあたり初めて菊川市を訪れました。その際、ワークショップを重ね考案した「詩のポスト」の設置作業を行い、菊川市の方々と話す多くの機会に恵まれました。1日という短い滞在でしたが、どこへ行っても笑顔がありあたたかく素敵な街といった印象を受けました。

2月時点で現地に訪れたことがない学生1名には、「ポストづくりを振り返って、何が面白かったか。」について聞いた。回答（抜粋）は以下の通りであった。

- 学生C ポストづくりのワークショップでは、はじめに事前調査を行ったことで菊川とブラジルについての知識が増え、それぞれの地域のことを身近に感じながら制作を行うことがで

きました。また、そのことを通して、実際に使う方々に寄り添ったものを作るという考え方を得ることができたことは、とても良い学びがあったと感じています。その他にも、話し合いだけで作業を進めるのではなく、実際に紙袋などを用いて手を動かしながら制作を行なったことも印象に残っています。話し合いを進めながら段々とポストが実際に目の前で出来上がっていく様子はとても楽しく、このような制作の方法があるのかと参加しながら驚きと面白さを感じました。

このことから、本来であれば遠隔地の大学による地域理解のフェーズは、まず地域を訪れてその土地の文化・風土・歴史等を見聞きして体験するところから始まるが、コロナ禍でそれが実現できない場合において、筆者らと同じ東京に拠点を持つ工藤氏と連携したことで、社会的な状況や立地による不利な状況を乗り越えて地域理解を深めることにつながられた様子であった。

4. まとめ

本研究の結果、遠隔地の大学が地域で活動するにあたり、地域と関わりを持つ一般社団法人や現地NPOと連携ネットワークを構築することで、大学としては地理的制約を乗り越えて地域デザインの実践が可能であることが示された。また地域としては、東京圏の学生が地域理解につとめる様子やそれによってデザインされた成果物を好意的に受けとめ、現地NPOも継続的な長期の関係性を求めていることが示唆された。参加学生には、地域を積極的に知ろうとする姿勢があることや、前提としてプロジェクトのマッチングが図れていることが重要となるだろう。

一方、本研究が積み残した課題として、高等教育機関空白地域に遠隔地の大学が関わる上で、それぞれに求められる条件や要点を1年間の活動で見つけられなかったことや、活動の成果を考察するにあたり、展示会の来場者の感想や現地NPOと学生3名の振り返りで評価したことは十分とはいえない。連携によって生まれる地域と学生への効果についても積極的に議論すべきであった。次年度以降の活動では、高等教育機関空白地域において遠隔地の大学がどのような点において地域貢献に資することができるか、評価対象や項目についても整理し、継続的に検証することとしたい。

注

- 1) 中間支援団体として市民・市民活動団体と、行政・企業・学校などとの協働をコーディネートし、まちの活性化につながる活動を支援する市民活動団体。
- 2) 市民芸術の醸成と地域文化の再編集をミッションに掲げ、文化芸術事業の企画運営、デザイン／ブランディング、メディア企画／編集、リサーチ事業を推進する社団法人。
- 3) 2020年春に、玉川大学STREAM Hall 2019の1階に新設された、工学部だけではなく、全学部の学生がデジタルマシンや工作機械を自由に利用できる、オープンなものづくりスペース。

参考文献

総務省 (2022) 「『域学連携』 地域づくり活動」

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html (2022年9月14日参照)

萩原遼、井上憲一 (2019) 「同一地域における継続的な域学連携の活動実態と意義」, 農林業問題研究
Jornal of Rural Problems 55(3),127-134 (2022年9月14日参照)

遠隔地の大学と高等教育機関空白地域による連携ネットワーク構築とデザインの展開可能性
Possibility of Building a Collaborative Network and Developing Design by Remote Universities and Higher Educational Institutions in Vacant Areas

菊川市（2022）「市政情報」ホームページ, <https://www.city.kikugawa.shizuoka.jp/index.html>（2022年9月19日参照）